

研究の守破離 (2) 思考は論文の型にとらわれるなかれ

研究推進委員の小菅です。前回掲載した声の中から今回は以下を取り上げます。

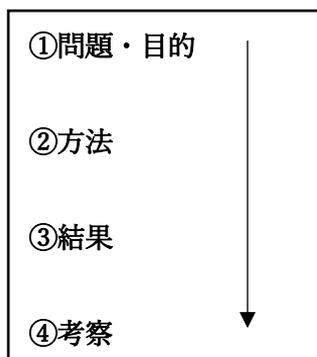
論文をいざ書こうとしても、だんだん何を書いているのか分からなくなってしまおう。

あなたは研究計画を立案する、論文を書く時にどうしていますか？熱量にまかせ一気に、内容を箇条書きにしてから、等がありますね。私のおすすめは、まず A4 の 1 ページに研究の全体像をまとめる方法 です。当然？いえいえ、想像とは違うかもしれませんよ。

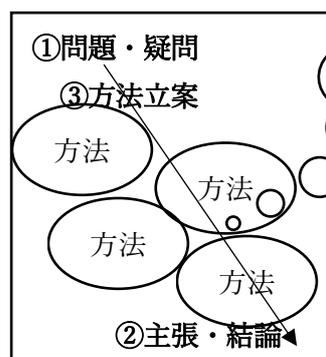
実践者は実践報告形式を、研究者は IMRaD (序論 Introduction、方法 Method、結果 Result そして and 考察 Discussion) 形式を*、上から順に書く方法 (左図・よくある例参照) を想像したのではないですか？学会の大会発表論文集も、私の大学で研究計画や内容を発表する時も IMRaD 形式でした。でもこの型に沿って考える方法は私には難しい…。研究計画時には、先行研究のレビューが膨大で問題・目的の段階で止まる。仮説と方法をひねり出し調査を実施したものの、予想と違った結果が出てしまい考察に困る。仕方なく論文を書きだすも、考察を書く頃には冒頭の問題・目的で何を書いたか忘れる。その結果、はじめと最後の繋がらないぐちゃぐちゃ論文？ができあがり泣く、という具合です。

そこで、ドイツの研究所に留学していた理系研究者に教わった A4 の 1 ページに研究の全体像をまとめる方法 (右図・おすすめ例) を紹介します。この方法は「日本では夜遅くまで研究していたけれど、ドイツでは定時で研究所を閉める。だから決められた勤務時間内に効率よく研究を進めるために、所内では成果が見えにくい研究や方法は初めから採用しない。」との背景で使われていたそうです。具体的には、研究計画の段階で①問題や疑問を出す、②それに対する結論や主張を明確にする、③そのための方法を考えるだけ出す、④問題に対する主張を最もよく表現できる方法を選ぶ、だそうです。これならゴールまでの道筋がはっきりするし、A4 の 1 ページなので何を書いていたか忘れることはありません。研究は問題解決の営みの 1 つではじめから論文の形式に沿って考えなくていい、つまり論文に書いてある流れと思考の流れが同じとは限らないと知った瞬間でした。

よくある例



おすすめ例



④問題に対する主張を提示するベストな方法を選ぶ

紙の使い方を変えるだけでも書くのが楽しくなるのでお試しあれ！

* 2021 年 7 月 『『アカデミック研究』のお作法と『学校教育現場の研究』のお作法』参照 (駒沢女子大学 小菅清香)